30

2020. 5

薬友会報

千葉大学薬友会

薬友会長・研究院長挨拶……………………… 2
退任のご挨拶………………………………… 2
医学薬学府学府長挨拶……………………… 5
薬学部この一年……………………………… 5
会員便り……………………………………… 7
研究室便り……………………………………10
クラス通信……………………………………12
サークル紹介…………………………………15
支部便り………………………………………16
学部だより……………………………………16
　教員の人事異動……………………………16
　第105回　薬剤師国家試験合格状況 ………17
　2019年度　卒業生・修了生の進路…………17
　2020年度　大学院医学薬学府
　入学者の状況（４月入学者）………………17
　2020年度　薬学部入学者の状況……………17
2019年の受賞記録……………………………18
薬友会より……………………………………19
薬剤師卒後教育研修講座開催のお知らせ……20
編集後記………………………………………20

薬友会長・研究院長挨拶　　森部　久仁一

薬友会会員の皆様におかれましては、益々ご健勝のこととお慶び申し上げます。令和２年４月より薬学研究院長・薬学部長を拝命致しました。私は千葉大学薬学部を卒業してから28年、他大学を経て母校千葉大学に講師として奉職後18年となります。いつも実年齢より上に見られますが、知命を少々過ぎた年代ですのでどうぞ宜しくお願い申し上げます。千葉大学薬学部は2019年より薬学科（６年制）50名、薬科学科（４年制）40名の１学年90名の定員となり、2020年を迎えました。オリンピックイヤーの本年は、土曜・祝日を一部開講することで７月の開会式までに前期の授業日程が終了しますが、本稿執筆時は新型コロナウィルス感染症への対応が取り沙汰されている状況であり､先行きは混沌としています。科学技術の進歩も含め、今後も予想もしなかった出来事が起こりうる中で、大学・学部の舵取りが求められている状況です。

千葉大学薬学部は人事面や教育面で大きな節目を迎えています。人事に関しては、2020年３月末で５名の先生方、戸井田敏彦教授（病態分析化学研究室)、山口直人教授（分子細胞生物学研究室)、齊藤和季教授（遺伝子資源応用研究室)、高山廣光教授（生体機能性分子研究室)、西田篤司教授（薬品合成化学研究室)、が定年退職されました。教授の数が４月より20名から15名に減少しています。一方で補充人事は一筋縄では参りませんが、このピンチをチャンスととらえ、薬学部の将来を見据えた組織体制作りを目指していきます。教育に関しては、千葉大学の教育改革に伴い、英語科目（６単位:１年～２年)、国際科目、地域科目、数理･データサイエンス科目の履修が必須となります。とくに、2020年４月の入学生からは、千葉大学の方針で入学者全員卒業するまでに海外留学が義務付けられます。学生の皆さんにはこれを義務ではなく自分を成長させる手段ととらえ、積極的に異文化交流や研究留学をしていただきたいと思います。

社会から求められる人材像は時代とともに変わります。千葉大学薬学部は「高い研究マインドを持ち指導的立場でグローバルに活躍できる人材の育成」を目指し、今後も歴史と伝統を継承していきます。教員と学生の業績につきましては、本会報に加えて薬学部ウェブサイトに掲載・随時更新しておりますので、そちらをご参照下さい。薬友会員の皆様には今後もご支援とご協力を宜しくお願い申し上げますとともに、千葉大学薬学部生涯教育セミナーや薬友会総会・支部総会などで皆様にお会いできますことを楽しみにしております。

退任のご挨拶　　戸井田　敏彦

2020年３月をもって定年により退職致しました。振り返りますと昭和49年（1974年）に薬学部製薬化学科に入学して以来、今日まで学部、大学院修士課程、博士課程の学生として９年間、また教員として30年間を千葉大学の西千葉および亥鼻キャンパスで過ごしてきました。今日を迎えることができましたのも多くの先生方をはじめとする皆様のご指導・ご支援とご協力があったからと心より感謝しております。

学部４年生のときに薬品分析化学研究室への配属を希望し、御縁で今成登志男先生、田邉信三先生のご指導を賜り、なんとか研究の道へ辿り着くことができたことを、今大変感謝しております。その後帝京大学医学部で６年間を過ごしましたが、それまで育った千葉大学とは全く違った環境の中で多くの知己を得ることができ、同僚であった先生方のみならず一緒に実験した臨床医の先生方には現在もご支援を戴いております。その後幸運にも1989年に薬学部に職を授かり今日を迎えた次第です。

薬学部に着任してからは、恩師である今成先生をはじめ多くの先生方、学生の皆さんのご支援の中、その時々に興味の赴くまま研究を続けてきました。生来集中力に欠けいろいろなことに興味をそそられてしまうため、一貫した課題を遂行する研究者とは程遠い道のりでしたが、数多くの思いがけない発見に出会うことができ、とても楽しく、恵まれた時間を過ごすことができました。中でも1995年から１年間、米国アイオワ大学薬学部Robert Linhardt先生の研究室に留学する機会を得たことは、今振り返っても自身の幸運に感謝しなければなりません。アイオワで家族とともに過ごした時間は、４年ごとに行われる米国大統領選挙のたびに蘇ってきますし、現在ニューヨークに移られたLinhardt教授には毎年のようにお目に掛かる機会を得て、帰国後25年にもわたり共同研究に携わることができました。

また2003年に今成先生の後任として研究室をお預りした際には、世界的な研究者でもある五十嵐一衛先生のご指導・支援のもと、現在の研究室での教育・研究の礎を築くことができました。感謝の念に堪えません。また私事ですが、負の思い出はどんどん忘れてしまい、楽しい愉快な思い出だけを貯めこむようにと諭してくれた祖父にも感謝したいと思います。

最後になりましたが、千葉大学薬学部・薬学研究院の教職員の皆様のご健勝とご活躍、そして益々のご発展を心より祈念申し上げ、私のご挨拶とさせていただきます。有難うございました。

退任のご挨拶　　山口　直人

私は、2000年６月に千葉大学薬学部にお世話になり、本年３月末に定年退職の時を迎えました。振り返ってみると、1974年に千葉大学薬学部に入学し、故北川晴雄教授が主宰された薬物学教室で卒研「ラット肝臓の薬物代謝酵素P-450の精製」を行い研究の面白さを体験しました。そして、東京大学大学院薬学研究科で「レクチンによる免疫系細胞活性化現象」の研究を行って修士と博士学位を取得し、摂南大学薬学部助手として「上皮成長因子によるシグナル伝達」の研究、熊本大学医学部免疫医学研究施設助手として「インターロイキン５によるシグナル伝達機構」の研究、Dana-Farber Cancer Institute/Harvard Medical School（Boston）博士研究員として「T細胞活性化におけるCD３複合体を介するチロシンリン酸化シグナル」の研究、La Jolla Cancer Research Foundation（San Diego）博士研究員として「ガラクトース転移酵素のゴルジ装置局在化機構」の研究、熊本大学医学部遺伝発生医学研究施設助手・助教授として「血液幹細胞のチロシンリン酸化酵素の機能解析」、静岡県立大学薬学部助教授として「がん細胞分裂におけるチロシンリン酸化酵素の機能解析」を行い、縁あって千葉大学薬学部に戻ってきました。

当分子細胞生物学研究室では、世界中の誰も思い付かない、新しい切り口を持つ細胞内シグナル伝達機構の研究「癌細胞におけるチロシンリン酸化シグナルの時空間的解析」を実行しようと決心しました。流行の研究には目もくれず、独自路線の研究を行うために、有名な言葉「夢見て行い、考えて祈る」、この４つの順番が大切、を座右の銘にしました。大変嬉しいことに、在職約20年間で、学部生83名・修士64名（留学生３名）・博士25名（留学生１名）・チュラロンコーン大学短期交換留学生６名が集まってきてくれました。皆で力を合わせた結果、①チロシンリン酸化酵素の新規細胞内トラフィック経路、②チロシンリン酸化酵素の細胞内小器官（特に細胞核）での局在と機能、に関する非常に斬新な成果を幾つも発見することができました。今後は、研究を通して教育する場である研究室を巣立っていった多くの個性豊かな学生が、社会で活躍する姿を見ることが私の楽しみの一つになりました。

おかげさまで、在職中は毎日がとても充実した教育研究生活を送ることができました。長い間どうもありがとうございました。千葉大学薬学研究院のますますのご発展を心よりお祈り申し上げます。

退任のご挨拶　　齊藤　和季

ちょうど35年前の昭和60年（1985年）４月に千葉大学薬学部生薬学研究室に助手として赴任して以来、長きにわたり皆様のお世話になりましたが、本年３月末日をもって定年退職いたしました。最初の10年間は村越勇名誉教授（残念ながら先生は本年１月に穏やかに永眠されました（合掌））の下で、助手、講師、助教授として働き、その後25年にわたり遺伝子資源応用研究室の教授として務めてまいりました。

初めて本学に着任した西も東も分からない時に、村越先生から「千葉に骨を埋めるつもりで…」と言われましたが、その時はあまりに先のことなので実感がまったく沸きませんでした。その10年後に教授になった時には、学外の大御所の先生から「定年まで四半期もあるのだから、常に新しいことに挑戦し続けないと10年でだれますよ」とも言われました。そんなこともあり、この35年間はうまくいったかどうかは別問題ですが、常に変革を求めて新しい分野やテーマにチャレンジしてきたと思います。特に、植物代謝産物についての植物ゲノム科学を開拓し、それをより一般性の高い分野に育てること力を注ぎました。

この間、しばしばドンキホーテのような振る舞いの私に付き合って一緒に走ってくれた新旧の研究室スタッフの皆様、ポスドク、大学院生、学生の皆様には深く感謝申し上げます。特に、2005年から私が理化学研究所にも研究拠点を立ち上げ注力したことにより、スタッフの方々には通常以上の多くの苦労と負担をかけたことと思います。実際に最近10年〜15年は、山崎准教授らが研究ビジョンも含め、実質的な研究室運営、大学院生・学生教育と研究指導、数々の研究費プロジェクト推進を真に主導的に担っていました。その間、私の役割は単なる広告塔にすぎなかったと思います。

私が千葉大学に職を得て以来、どれだけ人の役に立ったか？どれだけ社会の役に立ったかを？を振り返ってみますと内心忸怩たる思いです。しかし、私と共に歩んだ若い仲間や次世代の皆様に期待して、私の本学部での役目をここで終えることにいたします。この35年の時間の中で、本学部や全国の薬学部を取り巻く研究教育の環境が大きく変化しました。いわば旧世代の最後の教員としていま思うことは、変化に適応することは大事ですが、その核となる根源的な信念を磨くことはもっと大切かと思います。

最後に、千葉大学薬学研究院・薬学部のよさは、構成員がお互いに自らの個性や良心を尊重して、良識的な考えと信義に基づいて行動ができる点にあると思います。本学部・研究院のますますのご発展をお祈り申し上げます。長い間、ありがとうございました。

退任のご挨拶　髙山　廣光

私は昭和48年に千葉大学薬学部に入学し、卒業研究と大学院修士課程・博士課程（薬学研究科博士課程の第１期生として）の計６年間を坂井進一郎千葉大学名誉教授（昨年11月ご逝去）が主宰された薬化学研究室で過ごしました。私のライフワークとなったアルカロイドを素材とした化学的研究は、恩師の坂井先生からのご教授が出発点となりました。卒業後、西ドイツ・ハノーバー大学にアレキサンダーフォンフンボルト財団博士研究員として２年間留学した後、富山医科薬科大学（現富山大学）薬学部で２年余りを助手として過ごし、昭和61年７月に再び千葉大学薬学部に助手として迎えていただき、平成16年には生体機能性分子研究室の教授に昇任させていただきました。数えてみますと、定年退職した令和２年３月までの間、上記した４年間を除いた43年を千葉大学にお世話になったことになります。この間、私を支えてくださった多くの方々に心からの感謝の意を表したいと思います。

私は一貫して、薬用資源植物に含まれる生物活性アルカロイドの探索と化学合成・医薬化学研究を行ってきました。幸いなことに生体機能性分子研究室には毎年優秀な学生・大学院生が集まり、熱心に研究活動に励んでくれました。そのお陰で私自身は平成27年度日本生薬学会賞、平成30年度日本薬学会賞を受賞させていただき、加えまして直近の５年間に限っても、研究室所属の学生さんが学会などで延べ14件の優秀発表賞などを受賞したことは望外の喜びです。

学外では主に日本薬学会の活動に携わり、学会誌「MEDCHEM NEWS」編集委員長、日本薬学会医薬化学部会部会長、第33回メディシナルケミストリーシンポジウム実行委員長、日本薬学会理事、日本薬学会監事、日本薬学会副会頭などを勤めてきました。日々変わりゆく渋谷の街を横目に、日本薬学会永井記念館に長年足繁く通うことになりましたが､甲斐あって頼れる多くの知人･友人（飲み友達）に出会うことができました。

さて、私が研究院長・学部長を仰せつかった数年前にも激しい荒波が国立大学に押し寄せてきましたが、これからはそれにも増した波瀾万丈が予想されます。このの ち学部そして大学を担っていく先生方には、叡智を結集することで困難を乗り越えていっていただきたいと思います。最後になりますが、千葉大学薬学部の益々の発展を祈念申し上げます。長い間お世話になりありがとうございました。

定年に際して　西田　篤司

最近の薬友会報を見直し、ご定年退職された先生方の文章を読み直してみました。皆様、時のたつ速さを感想としてあげられていますが、私は少し違う感想を持ちました。1996年に助教授として千葉大学薬学部に採用され、中川先生のご指導のもと、研究と教育にあたらせて戴きました。2001年に中川先生の後任として、薬品合成化学研究室教授として昇任させて戴きました。2009年、それまで必死に（ちょっと大げさ）研究・教育に学生・大学院生と共に励んできて定年まであと10年という節目の年に、さて今後10年間でどんな研究をしようと考え研究計画を立てていたのですが、いくつか予想外の展開が始まりました。一つめは日本学術振興会「アジア研究教育拠点（ACP）事業」の二期目のコーディネーターを務めることになったことです。一期目の事業は名古屋大学、磯部稔教授のご指導の下、2005年から５年間継続し、アジア７カ国／地域の有機化学者の顔が見える交流が形作られました。私はその後を引き継ぐことになり、申請書作り、ヒアリングなど大変でしたが、無事採択され2010年４月より新たな５年間が始まりました。大学院生を対象としたジュニア国際シンポジウムを導入し、それが定着したことは大変うれしい成果です。

二つ目の「予想外」は12月に薬学研究院長を拝命したことです。二足のわらじを履きながら、薬学部創立120周年記念事業と薬学部亥鼻全面移転という、千葉大学薬学部にとって大きな事業の舵取りをさせていただいていた2011年３月11日、東日本大震災がおきました。西千葉の講義室で翌日の後期入試の準備をしていたときの地震でした。入試中止が決定し混乱の中、余震を感じながら過ごした一夜は忘れられません。報道された震災の被害の大きさに息をのむ思いでしたが、引き続く計画停電の中、不自由な研究・教育環境に甘んじなければなりませんでした。それでも、何とか120周年記念事業を進め、亥鼻移転が完了できたことは教職員一丸となった努力の賜物です。現在も新型コロナウィルスの猛威が報道されていますが、震災の後の辛抱を思えば何とかなると思います。2012年に採択された文部科学省「大学間連携共同教育推進事業」も私の視野を広げてくれました。その後、千葉大学副学長として千葉大学の国際化、研究力強化のお手伝いをさせていただきました。この定年前の10年間に本当に多くの方々に出会い、助けられました。それまでの研究生活とはまた違った体験をさせていただいたこと、充実した日々を送らせていただいたことに心から感謝申し上げます。有り難うございました。今後の薬学部・薬学研究院のさらなる発展を祈念いたしております。

医学薬学府学府長挨拶　伊藤　素行

昨年度より、引き続き医学薬学府学府長を務めさせていただきます。これまでの副学府長、学府長としての３年の経験を活かし、より一層気を引き締めてまいります。

昨年度は修士課程総合薬品科学専攻51名、後期３年博士課程先端創薬科学専攻10名、博士４年先端医学薬学専攻２名が課程修了致しました。博士後期３年課程先端創薬科学専攻で１名、博士４年先端医学薬学専攻で２名が優れた研究業績を上げげたと認められ、半年〜１年早期修了いたしました。４月より医学薬学府薬学領域では修士課程総合薬品科学専攻49名、後期３年博士課程：先端創薬科学専攻　11名（薬学領域）、４年博士課程：先端医学薬学専攻　薬学領域８名）の新入生を迎え、基礎生命科学ならびに医薬品創製に貢献できる国際性豊かな独創性ある研究者および高度の専門技術と研究能力を備えた先進的医療人の次世代リーダーの育成にあたります。

医学薬学府では文部科学省支援プロジェクトである、博士課程教育リーディングプログラム（https://www.m.chiba-u.jp/dept/lgs/）、未来医療を担う治療学CHIBA人材養成プログラム(https://www.m.chiba-u.jp/class/cipt/nyushi.html)、多様な新ニーズに対応する「がん専門医療人材（がんプロフェッショナル）」養成プラン（http://kanto-ganpro.net/）が実施されており、昨年度、新たに文部科学省卓越大学院プログラム「革新医療創生CHIBA卓越大学院」が採択されました。それに伴い、本年４月より本プログラム修士・博士課程の学生の受け入れを開始しました。これらのプログラムを通じて、国内外の大学や研究所、製薬企業、大学病院などで新しい医療を創造するリーダー育成のさらなる強化が期待されます。

さらに、千葉大学全学で本年度入学生より全員留学プログラムENGINEがスタートし、グローバル研究交流の発展が期待されます。昨年度も、海外交流、グローバル教育研究のため、短期・長期間の大学院生の海外派遣・受入を行いました。本年もダブル・ディグリー・プログラムによる海外からのダブルディグリー博士課程学生を受け入れるとともに、これまで以上に大学院生の海外派遣交流を行います。

今後も、薬学・医学の未来を担う重要な人材である修士・博士課程学生の育成に努力してまいります。引き続き薬友会会員の皆様のご支援とご協力をよろしくお願いいたします。

薬　学　部　こ　の　一　年

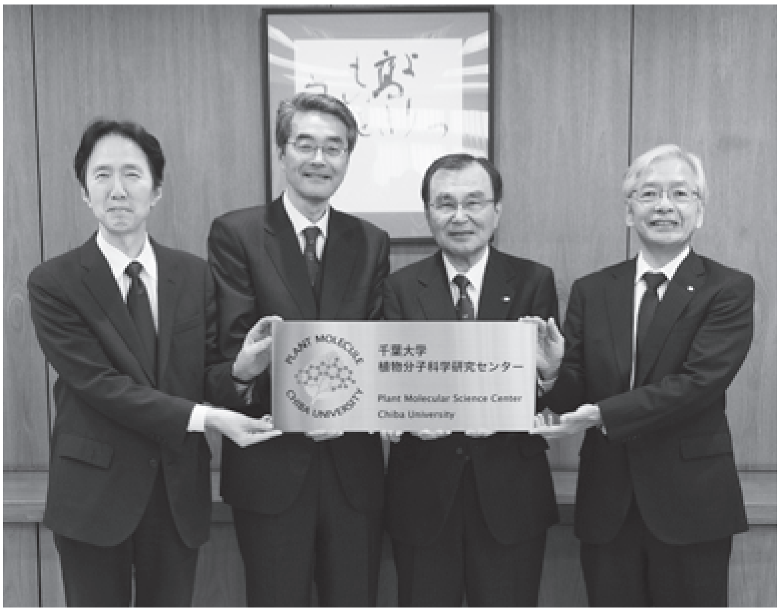
千葉大学植物分子科学研究センターの設立

千葉大学植物分子科学研究センター長　齊藤　和季

千葉大学では、2015年より戦略的重点研究強化プログラム６課題の一つとして、「ファイトケミカル植物分子科学プロジェクト」を重点的に強化してきました。この成果をもとに、2019年10月１日に「千葉大学　植物分子科学研究センター」が設置されました。

本センターは、論文被引用件数などの客観的データから千葉大学の強みである植物分子科学研究を結集して、キャンパスや部局を広く跨がった分野横断・融合による卓越研究拠点を形成します。今後さらに、この分野をさらに強化して国内外において植物分子科学を先導する拠点を目指します。特に、本センターは、地球と人類を支える植物について、植物分子（特に、遺伝子と成分）に注目し、ゲノムと環境で規定される植物機能の分子的解明とその応用を目的として研究を推進します。

本センターは、千葉大学の全４キャンパス、６部局からの約20名の兼務教員で構成されるバーチャルセンターとして、まず発足しました。第１部門（植物ゲノム機能科学）、第２部門（植物成分化学）、第３部門（植物環境応答）で構成されますが、第１部門および第２部門に薬学研究院の教員が強く関わっており、今後の本センターの発展には薬学研究院の関わりが大きく期待されます。

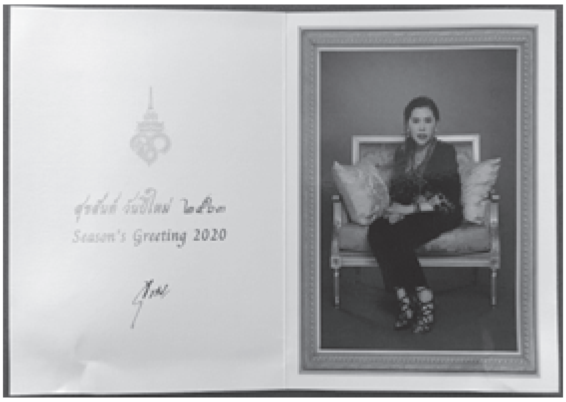


センター看板上掲式

タイ王国チュラポーン王女殿下が来訪されました

副学長　西田　篤司

チュラポーン王女殿下が、代表を務められているチュラポーン研究所及びチュラポーン大学院大学と千葉大学の大学間交流協定署名式のために、2019年12月11日に来訪されました。本学へのご来訪は2013年に続き２度目となり、徳久剛史学長を始めラーピセートパン駐日タイ王国大使御夫妻、石橋正己薬学研究院長等の御列席のもと、無事調印式を終えました。調印式の様子やチュラボーン研究所に留学経験のある薬学研究院大学院生のインタビューはタイのTV番組にて放映されました。チュラポーン大学院大学とは前回のご来訪時に交流協定を結んで以来、大学院薬学研究院では９名の大学院生を派遣し、また１名の博士課程学生を１年間にわたり受け入れてきました。さらに毎年のように研究者の交流を続け、研究力の向上、大学院生の英語コミュニケーション能力の涵養に大きな実績をあげてきました。2020年１月には４月からスタートする千葉大学全員留学プログラムENGINE（Enhanced Network for Global Innovative Education）に備えた研究・教育交流を話し合うために教員５名、大学院生４名がチュラボーン研究所を訪問し国際研究発表会を行いました。



調印式後、チュラボーン研究所より西田教授に届いた
王女殿下の写真が付いたカード

王女殿下のご来訪は、両機関のみならず、タイ王国と日本の友好発展にとっても意義深いものとなりました。

卓越大学院プログラム

医学薬学府学府長　伊藤　素行

文部科学省「卓越大学院プログラム」は、各大学が自身の強みを核に、これまでの大学院改革の成果を生かし、国内外の大学・研究機関・民間企業等と組織的な連携によって行う博士課程学位プログラムです。卓越した博士人材を育成するとともに、人材育成・交流及び新たな共同研究の創出を推進します。H30年度よりプログラムが開始され、千葉大学では令和元年度に、２つのプログラムが採択されました。そのうちの一つ、「革新医療創生CHIBA卓越大学院」は医学や薬学分野における人材育成の実績を基に、医学・薬学のみならず理学・工学も含めた広い分野で革新医療創生を担う卓越した『知のプロフェッショナル』を養成することを目指しています。このプログラムでは、博士課程進学志望の修士課程または４年博士課程学生の中から毎年15名程度が選抜されます。採用された学生は新しい医療を創造する卓越した人材として新たな医学の知の創出や社会実装に貢献できる能力を習得すべく所属機関や部局の枠を超えて組織された教育研究クラスターで学修するとともに、革新医療創生演習や実習などの特別な教育カリキュラムを受講し、高度な専門性と俯瞰力、独創力を養うことができます。修了者は国内外の大学や研究所、製薬企業、大学病院、医療行政機関等などで新しい医療における組織のリーダーとして活躍することが期待されています。

国際交流の現況

国際交流・留学生委員長　小椋　康光

千葉大学では、国際教養学部を中心に成果を挙げてきたグローバル人材育成戦略を全学に拡大展開したENGINE（Enhanced Network for Global Innovative Education）というプログラムが令和２年度より始動します。ENGINEの目玉は“全員留学”であり、令和２年度入学生から、学部生の留学を必修化します。すなわち、在学中に１回以上留学し、留学を単位として修得することが卒業のために必要となります。これまでも普遍教育科目の中で留学を行う科目もありましたが、ENGINEの始動に伴い、専門教育科目としても留学プログラムを構築することになりました。薬学研究院では、ENGINE始動の前年度にあたる令和元年度に、学術提携校を中心に各教員がENGINEプログラムの説明と本学学生向けの受け入れプログラムの策定依頼に奔走いたしました。薬学専門教育科目としての留学プログラムには、低学年向けプログラムとして、各国の薬学の現状や文化の理解、文化交流を中心としたもの、高学年向けプログラムとして、これまでのIPEを国際的に行うグローバルIPE（GIPE）を用意しています。また、日本学生支援機構の助成による研究交流を主としたプログラムも継続して行っていきます。このように薬学部では、一人一人の学生が広い視野から社会に貢献するために必要な国際経験の涵養を行えるように多様なプログラムを用意しています。

チュラロンコーン大学にて、伊藤学府長（左から２人目）、
森部副研究院長（左から３人目、役職は当時）

会　員　便　り

喜多　和子（千葉大学大学院医学研究院）

71P同期の友に「一般教養のポーリング・化学の小テストで満点をとっていたね」と言われるのですが、その後の私は、化学に強いとはいい難い状況です。学部の４年生の時に広瀬聖雄教授の生化学教室に配属になりました。研究の面白さに少し触れた頃に卒業を迎えてしまいました。

卒業後企業に２年ほど勤務した後、千葉大学医学部第２生化学教室で技術補佐員の職を得、幸いにも研究に携わることができました。研究内容は、核酸前駆体合成酵素に関する酵素研究や遺伝子クローニングでした。この期間は、子育てと研究のやりくりに苦戦しましたが、今思うと、充実した日々でした。心が痛むこととして、高校生の長女の携帯電話使用をめぐる家庭騒動や次女の誕生日をうっかり忘れるなどの騒動がありました。このような失敗を重ねながらも、周囲の方々の支援により、どうにか研究成果を論文化し、論文博士（薬学）を取得できました。その後、千葉大学大学院医学研究院・環境影響生化学、続いて分子腫瘍学で研究・教育職を得ることができました。研究活動では、放射線や紫外線などの環境ストレス研究やがん研究を、教育活動では、医学部２年生に対する生化学の講義を担当しました。そういえば、生化学も化学と言えなくもないですかね。２年前に退職しましたが、現在も分子腫瘍学で特任講師として、学生への研究指導と教育に関わっています。また、４人の孫のお祖母ちゃん稼業を楽しんでいます。　**（昭和50年卒業）**

今川　正良（名古屋市立大学 22世紀研究所 所長・特任教授）

学部４年間と修士課程２年間の計６年間を西千葉キャンパスで過ごしました。その後複数の大学を転々とし、３年前に名古屋市立大学を定年退職しました。今振り返ってみますと千葉大学薬学部衛生化学研究室で過ごした３年間が、私の大学生活の全ての基礎になったと思います。

1974年４月に４年生として研究室に配属された時、恩師山根靖弘教授より「これをやりなさい」とScience1972年３月号の論文コピーを渡されました。それ以外の指示はほとんどなかったと記憶しています。研究室で全く扱ってこなかった内容の論文で新たなテーマの立ち上げでしたが、放任主義の最たるもので、今なら教員がちゃんと指導していないと学生から苦情が出そうです。しかし、先輩や研究室の先生と一緒にあらゆる方面から検討し実験を組み立てていく楽しさがありました。３ページしかない論文でしたが、隅から隅まで何十回も読み返しました。手袋を使わずに動物実験をし、生臭い手のまま食堂に行き、45円のカレーライスを頬ばりました。楽しい思い出ばかりで、まさに古き良き時代でした。

国立大学や多くの公立大学が法人化してから十数年経ちますが、我が国の大学の進む道はこれで良いのかと思うことがあります。学生も教員も目先にとらわれる（とらわれざるを得ない）ことが多すぎます。一歩下がって視野を広く、先を見据えた教育・研究を進めることが重要と思います。千葉大薬はそれができる学部です。これからも我が国を牽引する学部として益々のご発展を祈念しています。

50年先100年先の未来を考えるために、私も名古屋市立大学22世紀研究所を設立しました。微々たる力ではありますが何らかの形で貢献できればと思っています。　**（昭和52年修士課程修了）**

山本　一美（Meiji Seika ファルマ株式会社　生物産業事業本部　生物産業研究所長）

「配属は、ノウチクヤク研究所」。入社式を翌日に控え、研修所で聞いた内命は全く受け入れられませんでした。農畜薬ってなんだ？

それから27年、農薬、動物薬の研究開発に携わっています。薬を創るための研究開発であっても、医薬品（人体薬）とは多くの異なる点があります。農薬、動物薬の開発においては、直接に皆さんが一生口にする食物に使用しても安全であるもの、地球環境への影響が短期、長期に極めて低いものが求められます。そのため安全性の確認に必要な試験は年々増加しています。さらに厳しい経済性。どんなに良い薬を作っても、一定範囲の価格で提供できなければ、農家さんの役には立てません。

持続的開発目標（SDGs）にも掲げられるように、世界的な飢餓問題、環境問題は深刻な状況です。まだまだ毎年病害や虫害、さらには異常気象により多くの作物が消費者に届かずに消えていきます。それらを解決できる１つの手段を提供するために、研究開発を続けていきます。　**（平成５年修士課程修了）**

山中　一徳（武田薬品工業株式会社　薬剤安全性研究所）

2002年に薬品物理化学研究室を卒業後、万有製薬（現MSD）に入社し、その後武田薬品に勤務して計18年が経ちました。その中で担当した業務はcomputational biology、translational research、discovery toxicologyです。勤務した場所はつくば、大阪、白金台、鶴見、ボストン及び湘南になります。最近はどの業界もグローバル化の影響で変化を求められていると思います。変化は経験の幅を広げる機会をくれますが、その分負荷もかかります。研究室で与えて頂けたご指導は、そういった変化を乗り越えるのにとても大切なことだったと改めて感じています。先生方や先輩方は専門性（計算化学）だけでなく、自分たちが持っている普遍的な知識・スキル（情報処理・プログラム）を活かして別の領域にも飛び込んでみることの大切さや面白さを教えて下さいました。またそれを自分たちが実践して見せてくれもしました。グローバル化の中でよく聞く言葉で表現するならば「しっかりとした軸・強み」と「フレキシビリティー」でしょうか。これら二つと「そこで出会えた良き恩師や仲間」この三つが折に触れては私を支えてくれています。創薬は長いバトンリレーのようなものですが、その中に自分の役割があることに感謝しながら、これからも周りに支えられ、そして自分も誰かを支え、仕事を続けていければと思います。　**（平成14年修士課程修了）**

笠原　広介（三重大学大学院医学系研究科・准教授）

1997年に入学、2006年に分子細胞生物学研究室（山口直人教授）で学位を取得しました。その後、愛知県がんセンター研究所での勤務を経て、４年ほど前から三重大学医学系研究科で、細胞が増殖するメカニズムについて基礎研究を進めています。

本稿執筆の少し前に、山口教授がこの３月で退官されることを知り、千葉大学での日々を懐かしく思い出していました。大学生の頃の私は、漠然と研究者を志望しながら、教授不在の研究室を配属先に選ぶような浅短な学生であったと思います。学部４年生の途中に山口教授が着任され、基礎研究の大切さや面白さ、研究者になるための心構えについて懇々と諭されたこと、時にお叱りを受けたことを覚えています。怠惰な大学生活を送っていた私には峻烈な教えでしたが、インターネットで情報を探ることが当たり前でなかった当時、その教えに盲目的に従って過ごした６年間の研究室生活が、私の研究者としての礎となったと思います。最近は、書類作成や学生指導に追われ、自らピペットマンを握る時間が減ってきましたが、あの頃の気持ちを思い出し、あらためて研究に邁進したいと思います。最後に、山口教授が口を酸っぱくおっしゃっていた「英語を勉強しなさい」とのお言葉も聞いておけばと反省しております。　**（平成18年博士課程修了）**

東　泰弘（理化学研究所　環境資源科学研究センター　研究員）

私は学部４年から博士３年まで遺伝子資源応用研究室にてご指導いただきました。出身は木更津市で、千葉大学に学び、現在は理化学研究所にて、植物の基礎研究に従事しております。学生時は同期の友人に試験勉強やレポート作成など助けて頂き、卒業できた記憶があります。これまで研究の仕事を続けることができたのは、ご指導して下さった齊藤和季先生と同学の諸先生方のおかげであり、感謝申し上げます。

理化学研究所の環境資源科学研究センターは、植物科学、ケミカルバイオロジー、触媒化学の異分野融合によって地球規模の課題に取り組み、社会の持続的な成長に貢献する研究開発を行っております。私は、高温ストレスに対する植物の適応メカニズムを明らかにする事を続けております。薬学部と大学院で学んだ知識は研究を進めるうえでの基礎になっています。

博士課程修了後は米国にてポスドク生活を５年間続けました。その間の経験は一生忘れられない思い出であり、今でも妻との日常会話にあがります。同僚や共同研究の方々からご理解を頂き、仕事を通じて多少なりとも気候変動対策に貢献できることはうれしい限りです。研究や実験が好きで貴学にて学ばれた皆様は、持続可能な社会を創る研究分野にもご活躍する機会があることをお伝えさせていただきます。

（平成19年博士課程修了）

齊藤　公亮（国立医薬品食品衛生研究所・医薬安全科学部・室長）

二月某日、スパムメールに埋もれ薬友会報の執筆依頼が届いていた。これもスパムメールかと思えば本物で驚いた。バックナンバーを眺めてみれば、お世話になった先生や現所属の部長といった錚々たる面々が寄稿しておりまた驚いた。相手を間違えて執筆依頼をしたのだろうと確認してみたが、是非にとのことでさらに驚いた。全く人生は驚きの連続である。

驚きついでに千葉大学薬学部に在籍した頃を振り返ってみた。授業に出た記憶はほとんどなく、出ても唯一空いている前二列で惰眠を貪り、研究室に所属したらラボで寝泊まり、破門覚悟で自ら論文投稿と、どう贔屓目に見てもまともではない。自ら振り返ってそうなのだから、関わった同期生や同窓生の目にはさぞ狂行・奇行の類に映ったことだろう。そんな私が薬友会報に執筆依頼をされるとは、まさに人生は小説よりも奇なりである。

それでも研究が続けられているのは、千葉大を含めて恩師や共同研究者の先生方、最近では研究を補助してくれるスタッフや研究員の部下に恵まれたからだと思う。感謝の念に堪えない。あとは良い研究ができれば、学生時代の狂行・奇行も、積み重ねた数多の失敗も、無駄ではなかったと言い張れる日がくるだろう。欲を言えばその時に寄稿したかったが、時を選べないのも人生か。

最後に、私を推薦してくれた恩師とそれを真正面から受け止めた事務局の挑戦心に、心からの敬意と礼意を表して文末の挨拶とさせていただきたい。

（平成22年博士課程修了）

六川　武美（塩野義製薬株式会社　バイオマーカー研究開発部）

学生時代、荒野先生の講義をきっかけに分子画像薬品学研究室を選択し、分子イメージング研究の世界に入りました。塩野義製薬に入社して８年が経ちましたが、入社以来、分子イメージングを活用したトランスレーショナル研究を目的に基礎研究から臨床開発での活用まで幅広い業務に携わってきました。８年前、新薬開発における分子イメージング活用はまさに黎明期といった状況で、半ば漠然と注目・期待されていましたが、現在は社内外で様々な研究結果が報告され、どのように使えば創薬のより効率化につながるか？どのような価値を生み出せるか？について様々な役割の方と議論することが増えてきました。必ずしも答えのある問ではないですが、日々の研究データを基に議論を重ね、よりよい創薬への貢献を目指して取り組んでいます。

また、会社での研究業務を進める中、千葉大学で学位を取得させていただき研究者として新薬創製に携わるうえで大きな自信となりました。学位取得の際には会社内外問わず大勢の方に多大なご指導、ご支援を賜り、たくさんの人に支えられて今の自分がいることを再認識いたしました。日々、感謝の気持ちを忘れずに、今ここにないヘルスケアの提供を目指してこれからも精進したいと思います。

（平成24年度修士課程修了）

山田　洋介（大正製薬株式会社）

先日、恩師である高山廣光教授の最終講義を拝聴するため亥鼻キャンパスを訪れた。在籍中の多くは移転前の西千葉キャンパスで過ごしたが、それでも母校に帰るというのは不思議と故郷に帰るような懐かしい気持ちになるものである。

私は高山先生のご指導の下、修士・博士課程と一貫して天然物化学の研究をさせていただいた。このときの研究で味わった未知のものを解明する喜びとワクワクする気持ちが今も研究を続けている原動力であることは間違いない。退官される高山先生には改めて御礼を申し上げるとともに、今後のご健勝・ご多幸を祈念したい。

さて、千葉大学を卒業した私は企業研究者となり、一貫してメディシナルケミストリーに携わっている。創薬は非常にゴールが遠い研究であり、苦闘の連続であるが、それでも楽しんで研究できていることを喜ばしく思う。８年の企業研究人生の中で、海外企業との共同研究に立ち上げから携わる機会を頂いたり、１年間の米国・Vanderbilt大学への留学の機会を頂いたりしたことは望外の喜びであり、千葉大学で学んだ基礎研究への熱が会社に評価されたように感じる。

それとともに感じることはPh.D.という肩書の偉大さである。自分は企業研究者として未熟であるが、それでも海外の研究者から一人前の研究者として認めていただける。これはひとえにPh.D.のおかげである。千葉大学で薬学博士号を取得した者として、６年制学科とともに、専門性の高い研究者を養成する４年制学科が共存する千葉大学薬学部の大きな特徴を今後も大切に、多くの優秀な人材を輩出してくれることを望む。

さて、話を自分自身のことに戻そう。創薬の世界は日々、進化している。新たな技術の進歩の中で『自分には何ができるのか』を常に模索しながら、千葉大学で学んだ探求心を胸にこれからの激動の時代をゆきたい。

（平成24年博士課程修了）

鶴見　ゆう

薬友会報第30号の刊行おめでとうございます。そうそうたる顔触れが名を連ねているであろう中、若輩者の私がこのような場で文章を書かせて頂くことは大変恐縮ではありますが、折角なので近況等を綴らせて頂きます。

私が薬学科を卒業し、茨城県職員として働き始めて、おおよそ３年になります。所属の中では古株で、そろそろ異動かという頃合です。ずっと食品衛生担当として働いてきて、やや薬とは縁遠い日々を送っておりますが、食品衛生の界隈も食品衛生法の15年ぶりの大改正やこれに伴う来年度からのHACCP義務化等といった大きな動きがあり、まだまだ学ぶべきことも多いので、いざ異動となれば名残惜しい思いもあります。ただ、県職員薬剤師の職務はこのほかに薬事行政、環境衛生行政、衛生研究所での検査業務、はたまた病院（茨城県は採用時に行政職と病院局を分けておりません）……と多岐にわたりますので、県民ファーストを念頭に、幅広い知識を身につけていきたいと思っております。

さて、こちらを書いている２月末日現在、連日ニュースはコロナウイルスの話題で持ちきりで、私の現在の所属にも、ひっきりなしに相談の電話が入っております。会報が発刊される頃には収束していることを願います。皆様方もどうぞご自愛下さい。

（平成29年卒業）

吉岡　佐保（塩野義製薬株式会社　創薬疾患研究所　ニューロサイエンス部門）

学部４年から修士２年までお世話になった生化学研究室を卒業後、塩野義製薬に入社し、丸３年が経とうとしています。神経科学分野の薬理として、うつ病をはじめとした精神疾患の克服を目指しています。学生時代はショウジョウバエにおける記憶の研究に従事していましたが、会社では一転、電気生理学的手法を強みとするグループで、パッチクランプ職人として技術を磨く日々です。入社時は、難しそうで遠い存在だった分野を提示され、期待と不安が入り混じっていましたが、今では、自分では選ばない分野を強みにできる機会を初めから与えてもらえて幸運だったなと思います。電気生理以外にも様々な実験に従事していますが、最近では、遊び半分でプログラミングにも手を出し始めました。AIやプログラミングなども遠い存在でしたが、やり始めると、初心者でもすぐにできることもありますし、見えるものが変わり、必要なものはある程度自分で作らなければならないことを実感するようにもなりました。私たちが普段重要視している情報の入ったシステムを作り、意外な情報を見出せたら面白いと思います。創薬は難しくなっていると散々言われている中、患者さんの生きづらさを克服するためには、私たちが進歩し続ける必要があります。新しいものを、なんとなく難しそうと敬遠するのではなく、少しずつでも挑戦する好奇心は失わないようにしたいなと思う今日この頃です。

（平成29年修士課程修了）

渡邉　弘樹（埼玉県衛生研究所）

私は現在、埼玉県で行政の薬剤師として働いています。行政の薬剤師は、主に薬事、食品、環境衛生等の衛生行政に従事しており、私が所属する衛生研究所は、これらの業務に関係する調査研究、試験検査、研修指導及び公衆衛生情報等の収集・解析・提供等を行う、埼玉県における衛生行政の科学的・技術的中核機関です。最近では、コロナウイルス関係の話で地方衛生研究所という単語を耳にすることも多いのではないでしょうか。

私の現在の業務は、水、特に飲料水中の化学物質等の分析で、薬とは縁遠い内容です。学生時代に沢山学んだ薬の知識を活かす業務ではないのは少し勿体ないという気持ちもなくはないですが、学生時代に興味のあった分野で仕事ができているため、充実した日々を過ごすことができています。

研究室時代は薬品製造学研究室及び予防薬学研究室（再編に伴い、在学中に研究室が変わりました）に所属し、有機化学やセレン化合物について学んでいました。現在の業務とはそれほど関連性はないように思えますが、分析の研究においては特に有機化学的思考が役に立つ場面も少なくなく、大学時代に学んだことはこうして繋がっているのだなと実感しております。千葉大学に入学してから今年で10年目になりますが、大学時代に思いを馳せつつ、これからも励んでいこうと思います。

（平成29年卒業）

河野　将人（中外製薬株式会社 製薬本部 製薬研究部）

９年間お世話になった千葉大学薬学部を離れ、2019年４月から中外製薬でプロセスケミストとして社会人のキャリアを歩み始めました。学生時代は毎日有機化学のことだけを考えて基礎研究に没頭していましたが、現在は化学工学・分析化学・安全工学・品質管理・各規制など幅広い分野について学びながら、安全かつ安定に医薬品を供給するための製法開発を行なっています。博士課程までの研究内容やスピード感とは大きく異なるため最初は戸惑いましたが、様々な方面でのスキルアップを楽しみながら働いています。

一方で、純粋な基礎科学に没頭できる大学の環境が懐かしく、羨ましく思うこともあります。何度挑戦しても目的の反応が進行しなかったり、収率が上がらなかったり、新しいテーマが思いつかず途方に暮れたり…当時は辛かったですが、今思えば、仲間と議論しながら時間を気にせずに自分が納得できるまで科学を追求していた研究室での日々は、かけがえのない時間でした。

千葉大学には、自らの将来を考え、自ら道を選び、自由に挑戦（学会参加や留学など）できる環境が整っており、社会人への準備期間としてこの上ない環境だと思います。在学生の皆さんには千葉大学で勉強・研究できる幸せを感じながら日々努力して欲しいと思いますし、先生方、職員の皆様には学生への大きなサポートを続けていただけましたら幸いです。

（平成31年博士課程修了）

竹添　智宏（大鵬薬品工業株式会社）

学部４年から修士２年まで免疫微生物学研究室（旧微生物薬品化学研究室）にてご指導いただき、卒業後の現在は、製薬企業で新薬の研究に携わっています。研究室では、川島博人教授より丁寧かつ熱心なご指導を頂きました。自身の至らなさからご期待に沿えなかった点ばかりではありましたが、そのご指導と研究室で過ごした時間が現在の私の研究者としての基盤を作ってくださったものと日々実感しています。また、大学の先輩・同期・後輩との交流は続いていまして、会えるのをとても楽しみにしているのと同時に、近況を伺い刺激をもらっています。

現在は生物系研究職として、研究者としても社会人としてもスタートしたばかりではありますが、周りの方々に支えられながら研究をしています。社内には千葉大学薬学部を卒業された方もいらっしゃり、仕事面だけではなく、精神面や将来のことも含めて助言を頂き、早速、大学の大先輩にお世話になっています。また、大学の先輩方だけではなく、同じ生物の分野内や化学といった他分野、さらには臨床などの部署の垣根を越えて、社内外の様々な方々とお仕事をする中で、新薬がいかに多くの人の手によって創られているかを痛感しています。今後とも沢山の方々に支えられながら、また支えていけるように頑張っていきます。

（平成31年修士課程修了）

研　究　室　便　り

予防薬学

令和２年度は、教員４名、博士研究員（学振PD）１名、博士課程３名、修士課程１名、６年生５名、５年生６名、４年生６名、研究生１名、技術補佐員１名、事務補佐員２名の総勢30名の大所帯となりました。今年度より、福本泰典講師が当研究室に移籍し、髙橋一聡さんが博士研究員として引き続き活動します。昨年度は研究室員の大きな頑張りにより、多くの賞をいただくことができました。2020年11月６－７日に、けやき会館にて生命金属に関する合同年会（ConMetal 2020）を主催します。国内の生命金属に関する複数の学会を合同で開催する初めての試みです。大所帯のパワーを活かして、活気ある学術集会にしたいと思っています。

免疫微生物学

現在は、スタッフ３名、博士課程学生４名、修士課程学生12名、学部学生５名の体制で日夜研究に取り組んでいます。留学生も多く在籍し、国際色豊かな研究室です。研究は糖鎖免疫と微生物学を融合した基礎研究と、これに基づく免疫疾患の治療法確立に取り組んでいます。大きなトピックとして、昨年10月に安保博仁先生が助教に就任されました。今後も研究室員同士、切磋琢磨しながら研究活動に邁進していきたいと思います。

分子心血管薬理学

当研究室では、循環器疾患の病態解明とそれに基づいた新たな治療法の開発を目指した研究を行っています。高齢化や生活習慣の欧米化により、わが国でも心不全の患者数が増加傾向にあります。これまでたくさんの心不全治療薬が開発され使われてきましたが、治療に反応せず改善がみられない患者はまだ多くいます。特に重症の心不全では、生命予後は極めて悪く心臓移植しか治療法がありません。病気の進行を止めるような有効な治療薬を開発して社会に貢献したいと考えています。研究室メンバーは徐々に増えており、現在は医学部の長寿医学研究室と共同研究を進めています。皆、頑張って基礎研究ならびに臨床研究に取り組んでいます。

分子画像薬品学

本研究室は、２名の教員と修士課程４名、学部学生７名、秘書１名の総勢14名で構成されています。昨年度に荒野泰教授が定年退職され、10月には上原知也准教授が教授に昇任し、新たなスタートを切っております。研究は、がんの画像診断薬剤やアイソトープ治療薬剤の開発研究を進めており、最近では、これら研究の両輪を融合したtheranostics（therapy ＋ diagnostics）への展開も目指しています。９月には第17回次世代を担う若手のためのフィジカル・ファーマフォーラムにて、修士１年の貝塚祐太君が若手奨励賞を受賞しました。コンパ、研究室旅行を楽しみつつ、日々研究活動に励んでおります。OB/OGの皆さま、いつでもお立ち寄り下さい。

実務薬学

実務薬学研究室には、関根祐子教授、石川雅之助教の教員２名と、博士課程１年生１名、修士課程１年生２名、学部４年生２名の総勢９名が在籍しています。教員２名が現役薬剤師ということから、外用薬のコンプライアンスに関する研究や、抗菌薬や抗がん薬のTDMに関する研究など臨床現場に近いテーマで研究を行っています。

実務薬学研究室は2020年４月で創立11周年目に入りました。卒業生の皆様をはじめ、当研究室に関わった全ての方々に感謝いたします。今後も研究活動を通じて、将来の薬物療法の要となる人材を育成することを目指して取り組んで参ります。引き続き温かいご支援のほどよろしくお願い申し上げます。

薬化学

卒業生の皆さん、最近の根本研究室の動向は以下の通りです。

☆2019年７月、研究室旅行として奥多摩でキャニオニングを体験しました。
☆2019年９月、ルイさんが社会に飛び立ちました。
☆2019年10月、ドイツからアリーナさんが短期留学に訪れました。
☆2019年10月、中国から唐さんが研究生として当研究室に加わりました。
☆2020年２月、台湾から方君が短期留学に訪れました。
☆2020年２月、３年生４名が根本研究室に配属されました。
☆2020年３月、酒井さん、長沢さんが社会に飛び立ちました。

2020年度は、総勢23名で研究室を運営します。

活性構造化学

活性構造化学研究室の2019年度の一番の出来事は，荒井緑准教授が2020年４月に慶應義塾大学理工学部生命情報学科の教授に就任することが決定したことです．荒井緑先生は2006年４月以来，当研究室において14年間にわたり有機化学を基盤とした天然物ケミカルバイオロジー研究において数々の素晴らしい研究成果を収め，2010年に日本薬学会奨励賞，2019年に日本薬学会学術振興賞を受賞しました．ご主人の理学研究院荒井孝義教授とともに千葉大学の将来を担っていただけるはずでしたので，千葉大学としては非常に残念ではありますが，今回のご栄転を心よりお祝いし，今後の慶應大学でのますますの活躍を期待いたします．

薬効薬理学

薬効薬理学研究室では、現在、教員３名、大学院生10名（博士課程１名、修士課程９名）、学部学生７名、補佐員３名の体制で活動しています。山形一行特任助教は2019年４月から本学医学研究院分子病態解析学講座に助教として異動されました。近年は、セラミドの生理機能解析を基盤として各種疾患の病態解明および新規創薬標的の探索研究を行っており、９月には中村浩之准教授が千葉大学先進科学賞を受賞しました。研究室旅行、BBQ、コンパなどを楽しみながら研究に励んでおります。卒業生の皆様、どうぞお気楽にお立ち寄りください。

薬品物理化学

薬品物理化学教室では2019年４月に西田紀貴教授が着任し、星野准教授とともに教員２名、博士課程１名、修士課程５名、学部生８名、研究生１名の新しい体制で研究室がスタートしました。研究室内の出来事としては９月に瞿良さんが学位を取得しました。研究室旅行は秩父に出かけ、ラフティングやうどん打ちなどを楽しみました。２月からは新たに５名の学部３年生が研究室に加わりました。タンパク質の立体構造解析に基づく生命現象の解明と創薬への応用を目指して研究を進めていきますので、ご支援の程どうぞよろしくお願いいたします。

薬物学

2020年の３月時点で、大学院生10名（博士課程４名、修士課程６名）、学部生17名（６年生２名、５年４名、４年生５名、３年生６名）、外国人研究生１名が研究室に在籍しています。かなり大所帯となりました。2017年度より開始したJST・CREST「リンパシステム内ナノ粒子動態・コミュニケーションの包括的制御と創薬基盤開発；H29-R４」の支援により、実験機器も充実してきました。2020年度より長年にわたり本研究室の研究や運営を支えていただいてきた小林カオル先生が明治薬科大学に栄転され、寂しくなりますが、若いスタッフである櫻井遊先生、田中浩揮先生とも連携して、今後も益々研究に励んで参りたいと思います。

医薬品情報学

医薬品情報学研究室には、現在、特任教授の神崎哲人、特任助教の山﨑由貴、石田大祐、廣瀬慎一の教員４名と学部学生２名、事務補佐員１名が所属しています。

本研究室では、生活習慣病・動脈硬化症の臨床研究、医薬品の適正使用の調査研究などに取り組んでいます。具体的には、①糖尿病患者における多剤併用の実態に関する研究、②後発医薬品の変更不可指示に関する薬局実態調査、③診療科別患者での服薬指導の特性に関する研究、④精神疾患患者の生活習慣病、動脈硬化性疾患の実態及び治療薬物の関連に関する研究です。

また、マツモトキヨシHDの寄附講座である特徴を生かし、産学連携で臨床的研究を進めていますので、どうぞ気軽にお立ち寄りください。

生化学

生化学研究室では、医学薬学府学府長を兼任する伊藤素行教授のもと、Notchシグナルなど細胞内のシグナル伝達、個体の老化・代謝・行動メカニズム解明、病態モデルの作製など幅広い研究テーマに取り組んでいます。本年度はゼブラフィッシュ・メダカ創薬研究会を主催し、兪さんが優秀口演賞を受賞しました。研究室旅行では、高尾山やビール工場見学を楽しみました。新たにタイや中国からの留学生を迎え、研究室内の会話で英語を利用することが多くなりました。１月からは６名の３年生を迎え、新体制で研究を推進させていきます。

社会薬学

本研究室は現在、教員３名、事務補佐員１名、大学院生７名、６年生５名、５年生４名、４年生５名の25名です。当研究室は臨床の課題を扱うため、様々な医療機関と連携をもちながら進めており、学外の方々などから多くの刺激を受けつつ、日々研鑽に励んでいます。また、地域貢献として、令和２年２月に、「くすりと安心してつきあう」及び「薬物の害と私たちの健康」を開催しました。これからも社会との連携を深め、臨床の課題に取り組んでいきたいと思います。

クラス通信

昭和23年卒業

昨年は原稿の要請が無かった為、昨年の情報より紹介。胃癌手術后、長らく療養中の土浦の中西君が亡くなった旨ご家族より連絡あり。又発病後僅か八日で亡くなった館山の吉川君の奥様のショックは、計り知れぬものと思います。謹んで両君に合掌。今年は千葉の大塚、名古屋の片岡、沼津の古橋、横浜の清水、と小生が健在、小沢は電話をしたが不在であった。中でも元気なのが清水君、昨年横浜港発着の瀬戸内海のクルーズをしたが船酔いで大変苦しんだ由。話題は飛びますが小生が千葉薬ゴルフを主催していた頃、会員になられた35年から44年卒業迄の方から未だに年賀状を頂いております。誠に有難い事で、皆さんのフォームやスコアを思い出しながら何回も賀状を見て居ります。

最後になりましたが薬友会の年度幹事を長らく勤め貴重な意見を述べられていた、昭和33年度の上野幸夫氏が年末十二月三日に肺癌で亡くなられました。「合掌」。私共の年令になると明るい話題が少ないですが、オリンピックに期待しましょう。　（三浦　清）

昭和32年卒業

昭和28年入学の我々は米寿が近い。その歩みは、医師に荒木英爾・青木瑞枝（旧・堀）・板橋光司郎、弁理士に山田和見、教育に畝本力（千大)・高山浩明（帝京大)・土屋隆（北陸大)・山田和見（金沢工大)。畝本力2013年瑞宝中綬賞受賞/小幡誠東京女子医大桜井靖久教授と未来医学研究会立上げ医療機器店発展に貢献/片岡久男2008年南太平洋アイルランドクルーズ/後藤八重子（旧・松本）『ラジカル重合の規制交互共重合における立体規制を中心に』1989年『高分子』/神力就子『オゾン療法』開発へ寄与『電学論誌』1994年/《枚方文学の会》同人高橋惇『法螺』73号2016年寄稿『クレーム担当者』は業界描写見事/高山浩明2001年日本薬学会学術貢献賞受賞/土屋隆1981年同宮田記念学術論文賞受賞/『ファルマシア』に芳川真丈『薬学文献情報検索システム』1977年・貼付用硝酸剤の辻和之『粘着テープ剤』1985年/辻村節子（旧・粕谷）山陸書房『オリーヴ』に『インド細密画の小径』連載/和田忠男『市民・情報専門職のための薬の知識』2009年『薬学図書館』。学術書/畝本力『特殊環境に生きる細菌の巧みなライフスタイル』共立出版1993/土屋隆『基礎有機化学』南江堂1996/福島正二『セチルアルコールの物理化学－クリーム製剤における液晶の生成と機能』フレグランスジャーナル1992/宮田満男『OTC薬とセルフメディケーション』薬事日報2018。加瀬泰明2006年㈱横浜バイオリサーチアンドサプライ創業。　（辻・小幡）

昭和34年卒業（亥鼻三四会）

昨年卒後60年を機に我同期会「亥鼻三四会」を解散した。最終回は5/16帝国ホテルで開催した。参加者（敬称略）は、安部知代、伊藤義人、岩﨑吉宏、神崎保徳、神田昌一、木下恒、齊藤友伸、関根克己、武川宏、武田豊彦、津田穣、長尾美奈子、中込義雄、中嶋啓介、野村幸一、西井戸惇子の16人の他に、最初の1年間だけ一緒に学び、その後東大に入学した廣部雅昭君も加わり、学生時代も含めて60余年間の思い出話に花を咲かせた。あっという間の3時間だった。

今後は、東京およびその周辺在住クラスメートの非公式会合「Fランチ会」が受け皿になる予定である。この会は、数年前から3ヵ月に1度開かれており、毎回12名前後が出席し、天麩羅を食べながら和気藹々と歓談するサブ同期会である。もし参加希望があったら上記メンバーの誰に問い合わせても次回開催日をご案内いただけるはずである。

昨年11月、尾上好克君、藤平榮一君が相次いで亡くなった。ご冥福をお祈りする。　（中嶋　啓介）

昭和35年卒業（珊瑚会）

昨年6月1日（令和元年）塩野谷氏幹事の企画で前回と同じ東京八重洲の「割烹島村」でクラス会開催。富士吉田市で花粉症対策に頑張った北川行夫氏がH30.9月に他界の報、一同ご冥福を祈って黙祷。

クラス会と母校薬学部の現況報告に続いて会員の近況、学生時代の思い出話に花が咲いた。

近況報告で歳相応な体調の改善維持への努力の話題が特に関心を持たれた。

80歳を過ぎて歳相応の健康状態ながら薬・サプリメントへの関心維持、ゴルフ、テニス、スキー。山行き歌、ダンス、彫刻・手芸など幅広い分野で皆さん活動しています。

会員が26名になりましたが今年は卒業60周年を迎えることになります。

海の宝石珊瑚、わがクラス会のシンボル、この絆を大事にして参りましょう。　（秦　初博）

昭和36年卒業（三六会）

このところ毎年開催しているクラス・ランチ会を令和元年5月21日に開催した。場所はお茶の水の東京ガーデンパレス内のつきじ植むら。出席者は10名（卒業時は留学生を含め47名)。最盛期は30名ぐらい集まったが仕方がない。病気で出かけられない人もかなりいるようだが、亡くなった人と不明な人は7，8人で、上下の学年よりかなり少ない。和食ランチを食べながらの話題は、先ずは近況だが、関心事は話す方も聞く方も病気の話。

10月初旬には、これも毎年行ってきた旅行に、これで最後かなと思いながら希望者5人で大内宿と会津若松の見物を予定し、東武鬼怒川線の特急列車を予約した。さあ明後日出発という時台風19号来襲で列車運休・

現地被害で、実行不能になった。
　今はコロナウィルス騒ぎだが、今年は良い年になってほしい。　（村上　泰興）

昭和37年卒業

　令和になりたての昨年５月11日、日本橋のレストランで昭和37年卒の同窓会が開かれた。出席者は９名であった。
　日頃の出来事を語り、同期の消息を伝えたり、秘めていた昔ばなしも飛び出して賑やかな宴となった。
　わがクラスも年々物故者があり出席者は年ごとに少なくなっている。薬友会報のクラス通信欄を見ると、我々よりも上の世代の方々の報告が少なくなり欄頭初に近いところに私どもの記事が記されるようになった。
　令和になって同級の者は80歳を超えるようになり老齢化を感ずるようになってきている。それに応じて同期会の在り方も変えざるを得ず、今後どのようにしてゆくかも話題となった。　（清水　征生）

昭和38年卒業（三葉会）

　令和元年（2019年）の「三葉会」は、鎌倉の予約のとれないと言う評判のフレンチ「古我邸」での食事会でした。
　11月17日（日）､秋の晴天に恵まれ､13時「北鎌倉駅」集合。駅から直接早目に鎌倉三洋館のひとつと言われている「古我邸」に行く人、一方鎌倉散策をしたい人は、時間を按配しながら、東慶寺、浄智寺、寿福寺と少なくなって来た花を探しながら、寺々を歩き巡って来ました。今回出席者17名でした。
　メニューは普段中々口にしない珍しい素材の組合わせの一品ばかり、ノンアルコールのシャンパンも、皆さん美味しい！とのこと、私も赤ワイン白ワインのノンアルコールについて認識を新たにした次第です。
　一人一人近況報告し、一年振りの再会を確認し合った所です。
　解散が遅かったので駅近くのホテルに一泊を予約し、翌日は三々五々鎌倉を散歩し帰宅した人、一方食後に街灯の少ない道を駅までおしゃべりしながら「又、来年」を約束して家路に着きました。（岡﨑　美沙子）

昭和40年卒業（峠の会）

　令和元４月27日（土）､「峠の会」を銀座八丁目の中國料理店で開催しました。前回および前々回の出席者は12名でしたので、今回はそれを上回る出席を期待したのですが、残念ながら今回も同じ12名でした。その理由の一因に日程設定がありました。27日はＧＷ10連休の初日だったので空路と新幹線の混雑で普天間さん（沖縄県）と日比さん（愛知県）が足を奪われ欠席を余儀なくされました。また出席予定の竹山さんはご主人が急逝されたため欠席となってしまいました。しかし、神は見捨てず熊谷さんと安田さんが数十年ぶりに出席してくれたのです。更に、この数年ご家庭の事情で欠席の荒木君が多忙の合間をぬって出席して会を盛り上げてくれました。
　例年通り21名から寄せられた近況報告を稲葉君が「近況集」として取り纏め、それに沿って各人から近況が報告されました。
　次回は令和２年４～５月に開催する予定でしたが、新型コロナウイルスの問題が発生したのでそれが終息してから改めて日程設定することとしました。
　欠席者には「峠の会」名簿（改訂版）、近況集および集合写真を送付し“ONE-CLASS”としての一体化の醸成に努めました。　（平野　武明）

昭和41年卒業（66会）

　「66会」は1966年、卒業以来毎年１回開催され１度も欠かすことなく今年で53回目です。令和元年６月２日（日）正午、当日は、梅雨時とはとても思えぬカンカン照りの酷暑の中、概ねが喜寿を迎えるメンバー18名は、そんなことは物ともせず益々元気に、上野駅公園口に集合しました。全員そろって移動する癖は昔から変わらず食事処の上野公園内「韻松亭」へ。涼しげな木立に包まれた会場で２時間余り美味しい和食料理、美酒をいただきながら、一年ぶりの再会を喜び合い情報交換しました。人生百年時代といわれる、これからの人生、健康長寿を目指しましょうと締め括った後再びそろってＪＲ山手線で日暮里へ､「朝倉彫塑館」見学。彫刻家朝倉文夫の世界を堪能し、続いて先ごろ「夕焼けだんだん」として話題を呼んでいる谷中銀座を散策して解散となりました。　（文責　植原）

昭和42年卒業

　特に大きな連絡事項がなかったので（年相応に足腰不自由だの、体調やや不調の報告はあれど）2018、2019年はパスした。2020年はどうしたものかと考えていたら、令和にあと僅かの４月に「昭和のタフガイ阿部君」がそして令和２年にあと僅かの12月に「沖縄のマドンナ嘉数（吉元）さん」が亡くなられたの訃報ありて愕然とす。また、我々が学生時代若き教授であられた薬化の坂井先生が12月に亡くなられたの報ありて「嗚呼、昭和も遠くになりにけり」と感慨に浸る今日このごろである。
　今現在４名を残し全員「後期高齢者」になりました。これからは一日一日を大切にして心残りの無いように過ごしたいものである。　（斉藤　　弘）

昭和43年卒（若竹会）

　令和になったばかりの快晴の５月16日、幕張メッセのホテル・ザ・マンハッタンにクラスの約半数の20人が重厚なアールデコの個室に集まりました。
　近来は毎年クラス会を行っていて卒後51年目に久しぶりの千葉市での開催でした。まだ現役で仕事を続けている方も多く、現況報告では自分自身の健康の話、地域の方のために将棋教室を開いたり、犬の里親

になったり、老人施設のボランティアをしているなどの話と共に、家族とのかかわり方、80歳に向けてどういう生きたいか、など、時のたつのも忘れ、話が弾み二次会を最上階のラウンジに移しました。近年は連れ合いの方もご一緒に参加して下さり、クラス会への参加意識が高く有り難いことです。75歳になられ、後期高齢者の仲間入りをした方が私の後期高齢者は好機（チャンス）好齢者（歳を重ねるを好む）であり、これからが人生の本舞台の始まりであると人生を前向きに生きる心得を説いた方もいました。確かに、「人生の本舞台は常に将来にあり」と74歳にして言われた憲政の父と言われた尾崎行雄の言葉です。

（文責：堀江　透）

昭和47年卒業

新元号「令和」が始まった昨年５月19日、木々の緑が爽やかで心地よい季節に、前回と同じ新橋第一ホテル東京のフレンチレストラン「アンシャンテ」で３年ぶりに同窓会を開催しました〈出席者は22名〉。最初に、柏木喜美子（磯部）さん（2017年）、関京子（佐久間）さん（2017年５月）が他界された悲報が伝えられ、一同黙祷を捧げました。次いで上野さんの挨拶・乾杯に続き、山本さん（千葉大学特任教授）が独創性と先進的医療を推進してゆく薬学部の近況について報告。続いて恒例の各自の近況報告。古稀を迎える方も多く、今までの人生を振り返りながら、ウイットに富む話、健康維持の方策や生活に役立つ情報などで盛り上がり、瞬く間に時間が過ぎました。写真撮影後、次回の再会を誓いました。

（川島　恒男）

昭和50年卒業

渡辺君からそろそろ同窓会を行おうという提案があり、今川君と寺田、そして喜多さんに加わってもらい、メール会議で開催時期を決めました。半年以上前に一番忙しそうな渡辺君が参加できそうな９月22日（日）に行うことに決めました。日が近づくにつれ台風が次々と発生したというニュースで、幹事としては開催できるかどうかハラハラでした。結局、同窓会を提案した渡辺君は、当日仕事が入り参加できませんでしたが、会は何とか天候に恵まれ無事に行うことができました。品川プリンスホテルの最上階のダイニングバー Table 9 Tokyoで開催し、喜多さんの開会の挨拶の後、39名の参加者は各自が席を移動しながら６年ぶりの再会を懐かしんでいました。最後に今川君から次は３年後の古希に会いましょうとの挨拶でお開きとなりました。同窓会の後の記念撮影は、私の連絡が遅れてしまったために何名かが抜けている可能性があります。

記念写真に加わらずにお帰りになってしまった方、ご容赦ください。

（寺田　勝英）

昭和52年卒業（73Pクラス通信）

一昨年、昨年とクラス会を企画したものの開催までこぎつけられませんでした。昨年は千葉での開催を計画し20名から参加の返事をいただいおりましたが、台風19号の来襲のため止む無く断念しました。今年こそは、この会報が皆さんの手に届く５月終わりに昨年開けなかった千葉での開催を企画しています。これを書いている今、新型コロナウイルスの感染が拡大しており心配ではありますが、早々に終息して是非とも令和初の開催まで漕ぎ着けたいと願っています。仕事をリタイアされた方、まだ続けられている方いろいろな便りが寄せられていますが、また皆で集い、楽しく語らいましょう。

（中村　英雄）

平成３年卒業

昨年夏に、二年ぶりの同窓会を東京で開催しました。一次会の参加人数は21名。例によって前回と同じような話題で盛り上がりつつ、久々に参加してくれた人や、第二、第三の人生の選択をした人から、新しい話を聞くことができて良い刺激になりました。二次会は少人数で学生時代を髣髴するディープな会となり、束の間のタイムスリップを楽しみました。今年の夏はオリパラがありますので、同窓会は来年に持ち越したいと思います。来年は学部卒30周年、これまで参加できなかった方、来年は是非。

さて、本稿執筆の２月現在、COVID-19の影響で東京の職場ではテレワークが推奨され、生活もどこかぎこちなくなっています。皆様のご健勝を祈念申し上げます。

（宮下　愛次）

平成24年卒業

私たち“06P”が卒業してから丸八年が経ちます。今春に学年担任であった齊藤和季先生がご退官されたと知り、月日の経過を実感せずにはいられません。

私は卒業後病院薬剤師として勤務しておりましたが、その間同窓生の活躍の場が多岐にわたることに常々感銘を覚えていました。困り事があり他分野に助けを求めると、どこかで同窓生に出会えるのです。この繋がりが千葉大学薬学部を卒業した何よりの強みなのだと感じています。またプライベートでも未だに大学時代の同級生が一番の頼りで、気兼ねなく会える友人たちが現在育児に奮闘中の私の心強い支えです。最近はなかなか学年全体が一堂に会する機会はありませんが、またいつか皆で語り合える日が来るのを楽しみにしています。

石川　美樹（旧姓：長井）

サークル紹介

薬友会ゴルフ会

令和最初のコンペを５月17日、大宮ゴルフコースで開催しました。当日は快晴で爽やかな風が心地よい好コンディションに恵まれました。直前に腰痛で参加を取りやめた方もおられましたが、久しぶりに村瀬氏・長谷川氏が参加されて合計９人でのコンペとなりました。最近好スコアを連発している田村氏がこの日も絶好調でベストグロスのプレーでしたが新ペリアでのハンデに恵まれず、多くのハンデをもらった幹事が幸運にも優勝という結果になりました。また、歳不相応の飛ばし屋である村田氏がショートホールでも実力の一端を披露されて、ニアピン賞３個中の２個を獲得しました。

以下に成績を報告します。
優勝：勝浦公男、グロス 93、ハンデ 19.2、ネット 73.8
２位：田村隼也、グロス 83、ハンデ　8.4、ネット 74.6

秋のコンペは天候不順の続くなか、11月22日に久邇カントリー倶楽部で開催しました。この日も朝から冷たい雨となりましたが、一人のキャンセルもなく参加予定者11人全員元気にスタートしました。しかし午後から雨が一段と強くなったため、後半のプレーを取り止め９ホールのコンペとしました。悪コンディションと速いグリーンに苦戦を強いられましたが、ハンデに恵まれた田村氏が優勝となりました。

以下に成績を報告します。
優勝：田村隼也、グロス 51、ハンデ 16.8、ネット 34.2
２位：村田　壽、グロス 50、ハンデ 14.4、ネット 35.6

薬友会ゴルフ会は三浦清氏（昭和23年卒）、原口克介氏（昭和38年卒）などが音頭を取られて発足し、今年で18年目を迎えます。春と秋、年２回コンペを新ペリア競技で行っています。参加者は千葉薬出身者とその知人を含めた広い範囲のゴルフ好きの集まりです。プレー後の打ち上げでは表彰式に加えて、卒業生・学部・教員に関するいろいろな話題を語り合い旧交を温めています。新規の参加者を大いに歓迎しますので、ご興味ある方はお気軽に幹事までお問合せ下さい。

次回コンペは令和２年４月14日に大宮ゴルフコースを予定していますので、これを機会に参加を検討下さるようお願い申し上げます。

幹事：勝浦公男（03-3565-3428）

ゐのはな山岳会

2019年は５回の山行と初詣、暑気祓、忘年会と例年に比べてかなり低調だった。

６月、会の結成60周年を記念し19名が上高地（添付写真参照）に集まったが、会員の高齢化、発病、死亡、若い世代の入会がないことで会の活性が低下しており解散もやむを得ないとの結論に達した。活動メンバーは50人から30人になり毎月の参加者数の平均が20名から10名位に減ってしまった。毎月の山行の参加者が10名以下になることは殆どなかったが（最低の参加者は平成７年の杓子山、平成12年の立岩の６名）一昨年９月入笠山では４名になった。

ゐのはな山岳会は昭和34年（1959年）６月に結成され60年間に約100名の会員が515回の山行の他に忘年会、暑気祓いで大いに親睦を深めた。また平成９年から10年をかけて萩庭先生が残した約５万枚のさく葉標本の整理をしてデータベース化し、写真撮影した後CD－ROMにした。しかし標本が膨大で科学博物館に寄託することになったのは残念である。

今後は“ゐのはな山歩会”として主に低山の山歩きをする予定である。参加希望、お問い合わせは角田（1977年卒　atukak@fb3.so-net.ne.jp）までお願いします。

（1958卒　福原）

薬学バスケットボールサークル

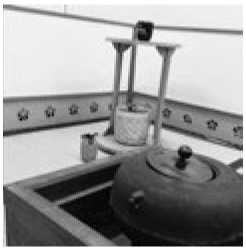
薬学バスケットボールサークルは、令和元年度に発足したばかりの新しいサークルです。研究室配属後の学部生・大学院生を中心に、亥鼻キャンパス体育館にて週１回、ゲーム形式を基本に活動しております。発足して間もないですが、常時20人程度の学生が集まる活気にあふれたサークルです。薬学部の教員や附属病院の医療従事者が参加されることも多いため、単に運動する場としてだけでなく、研究活動や医療現場についてお話を伺い、薬学に関する理解を深める上でも貴重な場となっています。

薬学部東洋医学研究会

当会では、「西洋医学に加えて、東洋医学も学ぶ ことで最善の医療を目指す」ことを理念として、１年、２年生が中心となり毎週木曜日に活動しています。内容としては、隔週で卒業生の先生方をお招きし東洋医学について御教授いただく自由講座と、学生自ら資料を持ち寄り発表しあう勉強会の２つを主な活動としております。勉強会では発表のあった漢方を実際に飲みさらに漢方について理解を深める活動や、夏の長期休みには生薬などを題材に３年生が中心となった実験を主催しています。また、大学祭では生薬を材料に作ったチャイや杏仁豆腐を提供しました。これからもより一層よき医療人となれるよう活発に活動を行なってまいりますので御支援の程よろしくお願いいたします。

薬学部茶道部

薬学部茶道部は毎週金曜日の16時から19時に薬学部Ⅱ期棟中会議室で活動しています。表千家の先生をお招きして、お点前の稽古をしています。季節に合わせて調度を変え、お花やお菓子を楽しみながら茶道を学んでいます。大学から茶道を始めた者も多いですが、先生が優しく丁寧に指導してくださるため安心して取り組むことができます。少人数ながら和気あいあいとした雰囲気です。秋の大学祭ではお茶会を開き、亭主は着物を着ておもてなしします。毎年多くの方にご来席いただいており、日頃の成果を発揮できるよう、練習に励んでおります。作法がわからなくても問題ないので、お時間があれば是非お立ち寄りください。



薬学テニス部

私たち薬学テニス部は週に１～２回西千葉キャンパスのテニスコートを使って活動しています。また、夏合宿やクリスマスパーティーなどの様々なイベントを通じて同じ学年だけでなく、先輩後輩の仲を深め大学生活の思い出作りや学部内での繋がりの場となっています。ここ数年で活動人数も急激に増え、2019年度入学者も35人ほど新たに加わりました。今年度も昨年度と同様に、千葉大祭で西千葉キャンパスの方に出店し千葉大祭を楽しみました。来年度も西千葉キャンパスの方に出店できたら良いと思います。テニスを楽しみながら、多くのイベントを開催し楽しい大学生活を送れる団体にしていきたいです。

支　部　便　り

東京支部便り

東京支部・千葉支部・神奈川支部による三支部合同総会が2019年11月22日18時30分から21時まで、茅場町のホテルオークラレストランニホンバシ（東京証券会館７階）で開催され、昭和33年卒から平成９年卒の22名が参加しました。東京支部の役員名簿と会計報告があった後、石橋正己薬友会会長（薬学部長）から「千葉大学薬学部の近況」についてお話を伺い、続いて千葉大学大学院薬学研究院実務薬学研究室の関根祐子教授（昭和61年卒）から「令和時代の薬剤師への期待と６年制教育」と題してご講演をいただき、懇親会で交流を深めました。2020年も「ホテルオークラレストランニホンバシ」で合同総会を開催する予定です。

（東京支部長　末永　昌文）

学　部　だ　よ　り

教員の人事異動

◎採用者

H31．4．1　西田　紀貴　薬品物理化学　教授（東京大学大学院薬学系研究科　准教授より）
H31．4．1　原　　康雅　活性構造化学　助教（千葉大学大学院薬学研究院　特任助教より）
H31．4．1　竹村　晃典　国際創薬学　特任助教（大学院生）
H31．4．1　宋　　彬彬　生物薬剤学　特任研究員（大学院生）
R１．10．1　安保　博仁　免疫微生物学　助教（ジョージア州立大学　Resarch Assistant Professor）

◎退職者

R１．9．30　宋　　彬彬　生物薬剤学　特任研究員（任期満了退職）
R２．3．31　西田　篤司　薬品合成化学　教授（定年退職）
R２．3．31　髙山　廣光　生体機能性分子　教授（定年退職）
R２．3．31　齊藤　和季　遺伝子資源応用　教授（定年退職）
R２．3．31　山口　直人　分子細胞生命学　教授（定年退職）
R２．3．31　戸井田敏彦　病態分析化学　教授（定年退職）
R２．3．31　荒井　　緑　活性構造化学　准教授（任期満了退職）
R２．3．31　小林カオル　薬物学　准教授（任期満了退職）
R２．3．31　佐藤　　玄　遺伝子資源応用　特任助教（任期満了退職）

◎辞　職

R１．10．31　岡本　悠佑　国際創薬学　特任助教
R２．3．31　西村　和洋　病態分析化学　准教授
R２．3．31　山﨑　由貴　医薬品情報学講座　特任助教

◎昇　任

H31．4．1　青木　重樹　生物薬剤学　助教より生物薬剤学　講師へ昇任
R１．10．1　上原　知也　分子画像薬品学　准教授より分子画像薬品学　教授へ昇任
R１．10．1　畠山　浩人　臨床薬理学　助教より臨床薬理学　准教授へ昇任
R２．4．1　原田　慎吾　薬化学　助教より薬化学　講師へ昇任

◎所属換

R２．4．1　福本　泰典　分子細胞生物学　講師より予防薬学　講師へ
R２．4．1　髙屋　明子　免疫微生物学　准教授より活性構造化学　准教授へ

第105回 薬剤師国家試験合格状況

令和２年２月22日、23日実施
新卒合格率　92.50％（受験者40名，合格者37名）

2019年度 卒業生・修了生の進路

学部４年生　45名
進　　学：千葉大学大学院医学薬学府修士課程、東京大学大学院理学系研究科
企　　業：㈱オリンピア・システムズ
公 務 員：厚生労働省人材開発統括官能力評価担当参事官室

学部６年生　40名
進　　学：千葉大学大学院医学薬学府博士課程
企　　業：興和㈱、㈱アインホールディングス、日本調剤㈱、㈱スギ薬局、㈱ヤクルト本社、日本新薬㈱、エーザイ㈱、大塚製薬㈱、シミック㈱、湘南薬品、協和キリン㈱、あすか製薬㈱、マツモトキヨシホールディングス、日産化学㈱、中外製薬㈱、クオール㈱、アステラス製薬㈱、バイエル薬品㈱、第一三共㈱
病　　院：国立国際医療研究センター病院、北里大学病院薬剤部、新座志木中央総合病院、船橋市立医療センター、東京都立大塚病院、慶應義塾大学病院薬剤部
公 務 員：東京都庁、厚生労働省、神奈川県、文部科学省
そ の 他：特定非営利活動法人八千代市薬剤センター

修士修了　50名
進　　学：千葉大学大学院医学薬学府博士課程
企　　業：大正製薬㈱、持田製薬㈱、キッセイ薬品工業㈱、武田薬品工業㈱、日本ベーリンガーインゲルハイム㈱、IQVIAサービシーズジャパン㈱、エーザイ㈱、出光興産㈱、塩野義製薬㈱、マルホ㈱、EAファーマ㈱創薬研究所、三菱ガス化学㈱、日本曹達㈱、大鵬薬品工業㈱、花王㈱、Meiji Seika ファルマ㈱、久光製薬㈱、㈱ツムラ、大塚製薬㈱、パーソルテンプスタッフ㈱、協和キリン㈱、日本ジェネリック㈱、アース製薬㈱、㈱リニカル

博士修了　12名
企　　業：ノバルティスファーマ㈱、湧永製薬㈱、富士フィルム富山化学㈱ 、住友化学㈱
病　　院：国立研究開発法人国立がん研究センター東病院
ポスドク：千葉大学大学院薬学研究院（日本学術振興会特別研究員）

2020年度 大学院医学薬学府入学者の状況（４月入学者）

修士課程：総合薬品科学専攻：49名
博士課程：先端創薬科学専攻（４年制）：11名
　　　　　　先端医学薬学専攻（３年制）：８名

2020年度 薬学部入学者の状況

入学者93名（男37名、女56名：推薦10名、前期70名、後期12名、私費１名）
出身高校一覧
５名　宇都宮女子（栃木）
４名　日比谷（東京）
３名　大宮（埼玉）、県立千葉（千葉）、市川（千葉）、東邦大学付属東邦（千葉）
２名　水戸第一（茨城）、開智（埼玉）、県立船橋（千葉）、昭和学院秀英（千葉）、新宿（東京）、両国（東京）、早稲田（東京）、豊島岡女子学園（東京）、横浜翠嵐（神奈川）、厚木（神奈川）、南（神奈川）、横浜サイエンスフロンティア（神奈川）、松本深志（長野）
１名　弘前（青森）、土浦第一（茨城）、並木（茨城）、川越女子（埼玉）、市立浦和（埼玉）、栄東（埼玉）、千葉東（千葉）、東葛飾（千葉）、専修大学松戸（千葉）、芝浦工業大学柏（千葉）、筑波大学附属（東京）、お茶の水女子大学附属（東京）、東京学芸大学附属（東京）、青山（東京）、国立（東京）、国分寺（東京）、小松川（東京）、戸山（東京）、西（東京）、小石川（東京）、多摩科学技術（東京）、南多摩（東京）、広尾学園（東京）、東京女学館（東京）、光塩女子学院高等科（東京）、豊島学院（東京）、八王子学園八王子（東京）、川和（神奈川）、聖光学院（神奈川）、洗足学園（神奈川）、湘南白百合学園（神奈川）、向上（神奈川）、直江津（新潟）、富山中部（富山）、高岡（富山）、富山第一（富山）、甲府第一（山梨）、静岡（静岡）、浜松北（静岡）、浜松日体（静岡）、向陽（愛知）、清風南海（大阪）、諫早（長崎）、青雲（長崎）、昭和薬科大学附属（沖縄）、その他１校

2019 年 の 受 賞 記 録

【教員の受賞】

平成31年３月	荒井　　緑	活性構造化学	日本薬学会学術振興賞
平成31年４月	原田　慎吾	薬化学	宇部興産学術振興財団第59回学術奨励賞
令和元年５月	田中　佑樹	予防薬学	第67回質量分析総合討論会　ベストプレゼンテーション賞
令和元年７月	畠山　浩人	臨床薬理学	医療薬学フォーラム2019／ 第27回クリニカルファーマシーシンポジウム　優秀ポスター賞
令和元年８月	中村　浩之	薬効薬理学	生体機能と創薬シンポジウム2019　優秀発表賞
令和元年９月	中村　浩之	薬効薬理学	千葉大学先進科学賞
令和元年９月	根本　哲宏	薬化学	Asian Core Program Lectureship Award（Korea）
令和元年９月	田中　佑樹	予防薬学	第５回次世代を担う若手のためのレギュラトリーサイエンスフォーラム
令和元年10月	田中　佑樹	予防薬学	メタルバイオサイエンス研究会2019　プラズマ分光分析研究会賞
令和元年10月	東　顕二郎	製剤工学	第２回仲井賞若手研究者奨励賞（製剤機械技術学会）
令和元年11月	齊藤　和季	遺伝子資源応用	Highly Cited Researchers 2019「植物・動物学（Plant & Animal Science）分野」に選出（クラリベイト・アナリティクス社）
令和元年11月	佐藤　洋美	臨床薬理学	第12回臨床薬理研究振興財団研究大賞（臨床薬理研究振興財団）
令和元年12月	田中　佑樹	予防薬学	第４回千葉大学グローバルプロミネント研究基幹シンポジウム　優秀発表賞

【学生の受賞】

平成31年３月	平田　健介	分子細胞生物学	日本薬学会第139年会　学生優秀発表賞（口頭発表の部）
平成31年３月	白鳥　麗香	生物薬剤学	日本薬学会第139年会　学生優秀発表賞（口頭発表の部）
平成31年３月	石井　貴浩	分子心血管薬理学	日本薬学会第139年会　学生優秀発表賞（口頭発表の部）
平成31年３月	齊藤　　惇	生体機能性分子	日本薬学会第139年会　学生優秀発表賞（口頭発表の部）
平成31年３月	和田健太郎	生体機能性分子	日本薬学会第139年会　学生優秀発表賞（ポスター発表の部）
平成31年３月	蒔田　吉功	活性構造化学	日本薬学会第139年会　学生優秀発表賞（ポスター発表の部）
令和元年５月	西村　公樹	製剤工学	日本薬剤学会34年会　最優秀発表者賞
令和元年６月	堀　　直人	分子細胞生物学	2019年度日本生化学会関東支部例会優秀ポスター発表賞
令和元年６月	熊　　　偉	免疫微生物学	第20回Pharmaco-Hematologyシンポジウム　優秀発表賞
令和元年７月	白柳　智弘	生物薬剤学	The 3rd Workshop for Japan-Korea Young Scientists on Pharmaceutics Oral Presentation Award
令和元年７月	土井　瑞貴	薬物学	第35回日本DDS学会　優秀演題賞
令和元年７月	五味　昌樹	薬物学	第35回日本DDS学会　優秀演題賞
令和元年７月	岡田ひとみ	製剤工学	3rd Workshop for Japan-Korea Young Scientists on Pharmaceutics Short Oral Presentational Award
令和元年８月	神　　亮太	臨床薬理学	次世代を担う創薬・医療薬理シンポジウム2019　優秀口頭発表賞
令和元年８月	髙橋　一聡	予防薬学	フォーラム2019：衛生薬学・環境トキシコロジー 日本薬学会環境・衛生部会優秀若手研究者賞
令和元年８月	塩川　絢子	予防薬学	フォーラム2019：衛生薬学・環境トキシコロジー 日本薬学会環境・衛生部会新人賞
令和元年９月	佐藤　圭悟	生体機能性分子	27th International Society of Heterocyclic Chemistry Congress Poster Prize（国際複素環学会）
令和元年９月	齊藤　　惇	生体機能性分子	第61回天然有機化合物討論会　天然有機化合物討論会奨励賞
令和元年９月	堀　　直人	分子細胞生物学	第92回日本生化学会大会若手優秀発表賞
令和元年９月	植田　　潤	薬化学	Junior ICCEOCA-9　ポスター発表賞
令和元年９月	五味　昌樹	薬物学	第19回夏期セミナー　優秀発表賞
令和元年９月	髙橋　一聡	予防薬学	第５回次世代を担う若手のためのレギュラトリーサイエンスフォーラム
令和元年９月	貝塚　祐太	分子画像薬品学	第17回次世代を担う若手のためのフィジカル・ファーマフォーラム 若手奨励賞
令和元年９月	岡田ひとみ	製剤工学	第44回製剤・創剤セミナー（日本薬剤学会） Best Poster Presentation Award
令和元年９月	岡田ひとみ	製剤工学	第63回日本薬学会関東支部大会（日本薬学会）優秀口頭発表賞
令和元年９月	西村　公樹	製剤工学	第25回創剤フォーラム若手研究会（創剤フォーラム） Best Poster Presentation Award
令和元年10月	北村　啓太	薬物学	第４回トランスポーター研究会関東部会　最優秀発表賞
令和元年10月	五味　昌樹	薬物学	第41回生体膜と薬物の相互作用シンポジウム　優秀発表賞
令和元年10月	梅原　健太	薬物学	第41回生体膜と薬物の相互作用シンポジウム　優秀発表賞
令和元年10月	髙橋　一聡	予防薬学	メタルバイオサイエンス研究会2019　閲賞（若手優秀研究賞）
令和元年10月	臼澤　　華	予防薬学	メタルバイオサイエンス研究会2019　実行委員長賞
令和元年10月	森川千佳子	製剤工学	製剤機械技術学会第29回大会（製剤機械技術学会）優秀ポスター賞
令和元年10月	西村　公樹	製剤工学	第36回製剤と粒子設計シンポジウム（粉体工学会）　奨励賞（カラコン賞）
令和元年11月	野﨑はるか	活性構造化学	植物化学シンポジウム松尾仁賞
令和元年11月	兪　　慧晴	生化学	第５回ゼブラフィッシュ・メダカ創薬研究会　優秀口演賞
令和元年11月	熊　　　偉	免疫微生物学	GlycoTOKYO 2019 シンポジウム　優秀ポスター発表賞
令和元年12月	熊　　　偉	免疫微生物学	千葉大学グローバルプロミネント研究基幹シンポジュウム　優秀発表賞

成績優秀賞･論文優秀発表賞

学長表彰
林　剛生
学部長表彰
林　剛生（薬科学科４年生）　五味　昌樹（薬学科６年生）
薬学科卒業論文発表会　優秀発表賞
木村　遥　　栗原　崇人　　高　健太
五味　昌樹　　兪　慧晴
修士論文優秀発表賞
浅見　詩生　　稲垣　早紀　　関根　成隆
橋本　佳典　　西村　公樹
学府長表彰
西村　公樹（修士課程）　髙橋　一聡（博士課程）

修士論文優秀発表賞及び学府長表彰

薬　友　会　よ　り

ご寄付いただいた皆様

令和元年度も薬友会の活動にご賛同いただき、多くの皆様からご支援をいただきました。
皆様のご協力に深く感謝を申し上げますとともに、ここに寄付をいただいた方々のお名前を掲載させていただきます。（五十音順、敬称略）

安　藤　　徹	市　川　佳　重	大　熊　進　二	小　熊　英　夫
川　田　和　広	小　関　東　洋	滝　澤　治　子	仲　川　明　子
中　田　正　子	西井戸　惇　子	西　原　尚　史	樋　口　智　明
比留間　良　一	古　田　尚　平	安　田　ひさ子	余　田　佳　子
渡　辺　和　夫			

（お名前の公表を希望されていない方につきましては、掲載しておりません。）
今後も、皆様方の暖かいご支援を何卒よろしくお願いいたします。

＜ご寄付のお願い＞

薬友会のさらなる活性化のため、ご寄付をお願い申し上げます。
一口２千円から随時受け付けています。同封の振込用紙に、①氏名、②住所、③卒業年度をご記入ください。

■郵便局より振込の場合
振替口座　00150－5－551796　千葉大学薬友会
■他金融機関より振込の場合
銀 行 名：ゆうちょ銀行　**店　　名**：〇一九（ゼロイチキュウ店）　**店　　番**：019
預金種目：当座　**口座番号**：0551796　**口 座 名**：千葉大学薬友会

＜訃報＞

千葉大学名誉教授　坂井進一郎先生（89歳）におかれましては、令和元年11月17日にご逝去されました。心よりご冥福をお祈り申し上げます。

＜薬友会ホームページ＞

薬友会ホームページ（http://yakuyukai.net/）には、同窓会開催のお知らせや薬友会情報などを掲載しております。情報掲載のご希望は、下記の薬友会事務局までご連絡ください。

＜薬友会事務局＞

薬友会に関するご質問、住所変更等のご連絡は下記までお願いします。
【薬友会HP「お問い合わせ」フォーム】：http://yakuyukai.net/contact
【Eメール】：yakuyukai@chiba-u.jp
【F　A　X】：043－226－2930

＜2020年度各種委員会名簿＞

（〇印：委員長。前委員長はアドバイザーとして参画。）
総務委員会　〇佐藤　信範、小林江梨子、櫻田　大也、村上　泰興、山崎　真巳（前委員長：アドバイザー）
財務委員会　〇森部久仁一、東　顕二郎、植田　圭祐、村上　泰興、石橋　正己（前委員長：アドバイザー）
名簿委員会　〇根本　哲宏、原田　慎吾、中島　誠也、村上　泰興、伊藤　晃成（前委員長：アドバイザー）
事業委員会　〇村山　俊彦、中村　浩之、本田　拓也、小椋　康光（前委員長：アドバイザー）
広報委員会　会報担当部門〇川島　博人、髙屋　明子、安保　博仁、高野　博之（前委員長：アドバイザー）

薬剤師卒後教育研修講座開催のお知らせ

本講座は既卒の薬剤師を主な対象とする勉強会ですが､どなたでも参加できます。千葉大学大学院薬学研究院･薬友会・医学部附属病院薬剤部および千葉県病院薬剤師会が共催します。令和２年度は次の日程・演者で開催します。

●第118回　2020年11月８日（日）13-16時、緩和医療、肺炎治療、在宅医療など。

講師：須藤　知子（千葉大病院)、山崎　伸吾（千葉大病院)、高瀬　義昌(たかせクリニック）を予定。

千葉大学けやき会館大ホール（西千葉キャンパス）で開催、参加費2000円・学生無料、予約不要です。各回、研修認定薬剤師〔(財）日本薬剤師研修センター※１〕(２点)、緩和薬物療法認定薬剤師〔(社）日本緩和医療薬学会※２〕(２点）を発行予定。2020年度より日本病院薬剤師会の認定も申請中。

※１ 発行にあたり、ご本人の薬剤師免許証番号が必要となります。ご不明の場合、お渡しできません。

※２ 日本緩和医療薬学会会員または会員申請中の方のみ対象です。詳細は薬友会のホームページに掲載します。

また、http://www.p.chiba-u. jp/lab/cpp/seminar.htmlではこれまでの活動をご覧いただけます。ご不明な点は臨床薬理学研究室　佐藤洋美（TEL：043－226－2877）までお問い合わせ下さい。

お知らせ：「薬友会生涯教育セミナー・宮木高明記念講演会」の開催見送りについて

千葉大学大学院薬学研究院・千葉大学薬友会の主催で、令和２年（2020年）度の「薬友会生涯教育セミナー・宮木高明記念講演会」の開催をこの夏に予定していましたが、新型コロナ感染症拡大防止のため、開催を当面の間見送ることとしました。参加を予定していた皆様や講演予定の先生方には誠に申し訳ありません。何卒ご了承下さい。今後の開催予定などは、薬学研究院ホームページでお知らせします。

お問い合せは、村山俊彦（薬学研究院薬効薬理学研究室）までお願いします。

（電話：043－226－2874　FAX：043－226－2875　e-mail：murayama-toshi@faculty.chiba-u.jp ）

編集後記

記念すべき第30号の編集を無事に終えることができ、お力添えいただいた方全てに感謝申し上げます。また、お忙しい中ご寄稿いただいた会員の皆様、誠にありがとうございました。

ちょうどこの編集後記を書いている今、新型コロナウイルスによる授業開始の遅れなど、大学にも大きな影響が出ています。この薬友会報が少しでも皆様にとって明るいニュースになればと、広報委員一同願っております。

なお、研究室便りに今回記載されていない研究室は、次号に掲載させていただきます。

広報委員会　会報担当部門　　川島　博人（委員長)、髙屋　明子、安保　博仁、高野　博之（前委員長）